

ドイツ革命と黒い光
——デアブリーンの『一九一八年十一月』

時 田 郁 子

1 光

ドイツのユダヤ系作家アルフレート・デーブリーン（1878-1957）は、1933年にナチスが政権を取るといち早く亡命し、フランスに滞在中の1938年に『一九一八年 市民と兵士』⁽¹⁾を出版、1940年に亡命先をアメリカに移して続編を執筆し、第二次世界大戦後ヨーロッパに帰還して、『裏切られた民衆』⁽²⁾（1948）、『前線部隊の帰還』⁽³⁾（1949）、『カールとローザ』⁽⁴⁾（1950）を出版し、四巻本の三部作『一九一八年十一月 あるドイツ革命』を完成した。この作品は、第一次世界大戦の敗北後からスパルタクス団の蜂起に至る数ヶ月間のドイツの情勢を描く時代絵巻である。作品成立の背景には、亡命中のデーブリーンが亡命せざるを得なかった要因をドイツ革命に遡って追究しようとしたことがある。彼は執筆の事情を1946年に次のように述べている。

1935年のパリで1918年のベルリンに私が探すべきは何だったのか。やはり何らかの理由があったはず、飛び込んでくる思いつきの断片に手を伸ばそうと私は思った。きっと核心に近づけるだろうと考えた。それは少しずつ闇の中をよたよたと、見かけは日々の出来事の糸にくっついてきた。——私は一日ずつゆっくり11月9日から年の変わり目へ動いていった。——だがすべての物事はすぐに新聞に記されたものではなくなった。それらはどんどん何か別のものになった。政治はもはや単なる政治ではなかった。物事は現実を失わなかったが、奇妙な光がそれらに降り注ぎ、その色合いを揺らめかせ、別のように進んだ。そして、私が天国と地獄の間を動いていて、あらゆる物事が、そう、日々の出来事や著名な政治家たちの名を冠した実際の政治的事柄がこの空間にあると明

らかになるまでに、二・三巻が必要になった⁽⁵⁾。

デーブリーンは作品内の随所に当時の新聞記事を引用し、これらの「物事」の集積の上に「歴史／物語 (Geschichte)」を構築しようとする。すると、「すべての物事」は過去の事実とは「何か別のものに」なった。その原因は「奇妙な光」にあるという。過去の「物事」を「別のもの」にする「奇妙な光」とは何なのか。『一九一八年十一月』には、歴史上あるいは創作上の人物が数多く登場するが、本論では全巻を通して登場するフリードリヒ・ベッカーに着目する。彼は第一巻の冒頭でストラスプールから故郷のベルリンに戻り、自宅で精神錯乱を起こして、霊界からやってきた使者たちと対話を交わす。そこでベッカーの視霊体験、死者の弔いという主題、革命末期に彼が取る行動を考察して、作者が「物語」に織り込んだ「奇妙な光」の照射を追い、作品内に内包されたデーブリーンの世界観の解明を目指す。

2 新生

まず主人公フリードリヒ・ベッカーがどのような人物か、簡単に押さえておこう。彼は古典文献学の教師であり、将校として第一次世界大戦に参加し、物語の開始時点では、戦場で弾丸を受けたため半身不随になり、ストラスプールの野戦病院に収容されていた。彼はユーモアのセンスを持っており、下半身を全く動かせない状況を「僕は古のケンタウロス、僕の下部の馬は射殺されて、僕の上部の人間の肉体は立ち往生だ。」(I. S.119.)と言い表した。すると医師や看護師が回診の折に「馬はどうしています？」(ebd.)とベッカーに尋ねるのが慣わしになって、彼は瞬く間に病院内の人気者になったという。

彼が上半身は人間、下半身は馬から成るギリシア神話に登場するケンタウロスのイメージを半身不随の身体に当てはめたのは、周囲の人々の心をほぐしただけでなく、彼とケンタウロスの類似性を暗示することになった。ケンタウロスは、馬の胴体に人間の男の上半身がついた幻想上の存在で、人間の内面的な葛藤をあらわすシンボルになっており、獣性を体現する一方で、自然と密接な関係にある点から、賢者ケイロンのように薬草の知識を持つポジティブなイメージを帯びることもある⁽⁶⁾。それはベッカーにおいて好色さと賢さという正反対の性質を表す。彼が「僕の下部の馬は射殺された」と表現したのは、彼が好色さを、言い換えれば、恋愛対象となる他者への関心を失ったことを意味し、彼が看護婦のヒルデに迫られたときも、その後彼女が彼の元を去ったときも「立ち往生」しただけだったのはこれに起因する。また一般に馬の下半身を持つ存在といえば、悪魔が連想される。この作品には悪魔^{サタン}が登場し、革命中にはもう一人の視霊者ローザ・ルクセンブルクと頻繁に対話を交わし、革命の数年後にベッカーと賭をするのだが、この悪魔が馬の足を持つ者と記される (IV. S.758ff.)。ベッカーは馬のイメージを自分に当てはめて、自分でも気付かぬうちに悪魔との接触を予言しており、彼の賢さもそれにより何らかの変化を被るだろうと予想される。いずれにせよ、ベッカーはそれまで乗っていた馬を失い、これから二本足で歩かなくてはならない。彼の新たな歩みには幻聴や幻視の体験が関わってくる。

ベッカーは、戦場で身体上の怪我だけでなく精神的^{トラウマ}の外傷を負っており、ふとした折りに「精神的空虚」⁽⁷⁾に陥る。そのとき彼は、神秘主義者のヨハネス・タウラー (1300 頃 - 1361) と霊界からの使者たち (ブラジルの男、ライオン、ネズミ) と対話を交わす。

ベッカーが最初にタウラーの声を聴くのは、ストラスプールからベルリン

に向かう夜行列車の中である。ストラスブールは、第一次世界大戦の終結に伴い、ドイツ領からフランス領になった。ベッカーは、ドイツ軍とドイツ語系住民が撤退するのに乗じて帰還する途中に、「留まれ！留まれ！なぜおまえたちは行こうとするのか？」(I. S. 164.) という声を聴く。声の主であるタウラーは14世紀のストラスブールで活躍したドミニコ会士で、マイスター・エックハルト(1260-1328)とハインリヒ・ゾイゼ(1295頃-1366)と並ぶキリスト教神秘主義の代表的思想家の一人である。そうした人物がドイツの首都へ帰還する主人公を呼び止め、その後ベルリンまで付いていくのは、アルザス地方のドイツ語文化の終焉を表している。そしてタウラーが八回に亘ってベッカーと交わす対話⁽⁸⁾は、「精神的空虚」の状態にあった主人公に大きな影響を与え、「ベッカーはタウラーの導きの下で回心し信心深いキリスト者になる」⁽⁹⁾。確かに彼はタウラーの思想に触れてキリスト教信仰に向かい、彼の母の慈善活動に理解を示し、教会関係者と対話を交わすのだが、より重要なのは、彼がタウラーによって行動を起こすよう鼓舞されることである。その様子を彼らが12月5日頃に交わした四回目の対話から検討しよう。

「僕はあなたを待っていました、我が父よ。僕は恐れています。」

「おまえが恐れていると？おまえは呼ばれ、動き始める。」

「本当に僕はそうするのでしょうか？」

「ああそうだ、我が子よ。だがおまえはいつも戸惑う。おまえはいつも戻ろうとする。おまえはいつも耳を閉ざそうとする。薄皮が破れた蛹。どれくらい長くかかろうとも、皮が破れれば、おまえは皮を脱ぎ捨てねばならない。」

「どこへ？何になるのでしょうか？別の現存在でしょうか？」

「おまえが考えているのは魔法劇、新しい舞台だ。それはずっと簡単に骨が折れる。おまえの人生はまだ続く。」

「どのような人生が？」

「ずっと自由でずっと豊かな人生が。苦痛が大きければそれだけ喜びも大きい。新しい誕生だ。おまえは母にして子だ。誕生を喜べ。もう始まっている苦痛を心配するな。私がおまえを助けよう。フリードリヒ、信頼せよ、おまえは助けがないわけではない。」

「僕がどこへ行くのか、教えてください。」

「おまえの内部、おまえの自我、おまえの魂が語るだろう。それは歌うだろう。おまえはその歌を理解しないだろう、最初のうちは。」

しばらくの間、次の語が彼の中にこびり付いた。「それは多声の歌、交互歌唱になるだろう。」(II. S. 424.)

このときベッカーはタウラーを「我が父」と、タウラーはベッカーを「我が子」と呼び、二人の信頼関係は確立している。タウラーは、ベルリンの自宅に引きこもったベッカーを羽化する寸前の「蛹」に喩え、戸惑ったり元の状態に戻ろうとしたり耳を閉ざしたりせず、「呼ばれ」たら「動き始める」よう励ます。卵が孵り、幼虫、蛹、そして成虫になる変態では、母が卵を産む最初の段階を除いて、虫は自らを次の段階に押し出さなくてはならない。タウラーが「おまえは母にして子だ。」と表現したのはこれを指す。虫は適切な時期に脱皮し、その各段階はすべて「誕生」に等しい。タウラーは、これらの「誕生」は苦痛を伴うが、その分喜びもひとしおだと言い、苦痛を不可欠なものとし、積極的に苦痛を受け入れることを推奨する。

田島照久氏はタウラーの神秘主義の特徴として、「人が純粹性と単一性の

内に向くということは（中略）、タワーにおいては日常的な苦しみのなか
 にあって、ここにとどまり苦しみを担いきることによって獲得すべきものと
 して説かれていくことになる。人間は神の懐へまっしぐらに飛び込むために
 はこの世の獵犬に徹底的に狩られねばならないという雄渾な「受苦」のモ
 テーフが（中略）心理的なきめ細かいタワー独自の司牧的説教を生み出し
 ていくことになるのである。」⁽¹⁰⁾と述べる。この解釈は、現世での苦痛を受け
 入れた上で高みを目指すようベッカーに示すデーブリーンのタワー像と一
 致する。また、キーゼルのタワーの「精神的生の三つの道ないし段階につ
 いての教義」が、すなわち「浄化により（via purgativa）」、「観照により（via
 illuminativa）」、「合一により（via unitiva）」⁽¹¹⁾ 精神的に深化する過程が、これ
 からのベッカーの歩みに合致すると指摘する。こうしたタワー思想の特徴
 を踏まえてベッカーの足取りを追うと、彼が自宅に引きこもる状態は「浄化」
 に相当する。ベッカーはタワーに今後の指針を与えてほしいと願うが、タ
 ウラーは「おまえの内部、おまえの自我、おまえの魂が語るだろう。それは
 歌うだろう。」と述べて、自分の内から湧き上がる歌に耳を傾けるよう告げる
 だけであり、そこにベッカーが最初のうち魂の歌を理解しないことも付け足
 し、この歌が「多声の歌」、「交互歌唱」になると、つまり、ベッカーの内部
 での対話になることを仄めかす。事実一週間ほど経つと、彼はブラジルの男
 とライオンとネズミと自我の問題を巡って対話を交わすことになる。「観照」
 の段階は、彼がギムナジウムの授業中にソフォクレスの『アンティゴネー』
 の解釈を披露するときである。その後彼は、ギムナジウムを舞台にする一連
 の事件に應對し、スパルタクス団の武装蜂起に偶然参加する。彼が世間から
 非難を浴びながらも自らの信条を貫き行動する姿は、田島氏の言い方に則せ
 ば、「この世の獵犬」に「狩られ」る「受苦」の具体例にして、キーゼルが指

摘する、「合一」に至る前段階である。タウラーは、ベッカーに苦痛の多い未来が待ち受けていることを示し、彼がそれを喜んで受け止めるとき、新たな存在に生まれ変わり、「合一」に至ると予告したのである。

3 魂の歌

魂の歌は、ベッカーが12月11日、タウラーと五回目の対話を交わした直後に始まる。彼は、不自然にも見知らぬ異国風の男が自室で寛いでいることに気付く。それがブラジルの男である。翌日までの間にライオンとネズミが出現し、ライオンが「たとえ俺たちの間に意見の相違が生じようとも、あんたが二つのこと、俺の力とあんたを待ち受ける運命について疑わずに済むよう、俺はライオンとしてやってきた。」(III. S. 257.) と言うことから、ブラジルの男とライオン、そしてネズミは、霊界からの使者の三様の姿であり、ベッカーと彼らの対話が「多声の歌」、「交互歌唱」になると予想される。

ブラジルの男は、ベッカーの戦争責任と個人的責任についての考えが「霊界 (Geisterwelt)」でセンセーションを巻き起こしたと告げ (III. S. 233f)、ベッカーの「自我 (Ich)」観を話題にする。ここで着目すべきは、ベッカーが「霊界」を、多少疑念を呈するにせよ、受け入れている点である。それにしても「霊界」とは何なのか。「霊界」から使者がやってくる目的は何か。ブラジルの男は言う。

「(略) あなたの出発点はこうです。あなたは現代史の偶然的事実を引きずられるのを拒んでおられる。あなたはいかなる状況でも時代のスローガンに従わないと説明なさる。あなたはご自分の土台を自分の内のみ

見つけねばならず、見つけることができる。あなたが時代を意のままにするのであり、時代があなたを意のままにするのではない。」

「そう、私の考えそのものです。」ベッカーは断言した。

「素晴らしい、ブラボー。それこそ私たちの世界への入場券です。あなたはそのですぐに正しい踏み台を手に入れます。今度の質問はこうです。あなたはどれくらい飛ぶつもりですか。まずはご注意を。あなたは否定的な意味でのみ自由なのです。今のところ。しかし自由は力を意味します。どんな力の回りを巡るのか。どのようにしてあなたはご自分が到達する自由を利用なさるのでしょう。」(III. S. 238.)

ベッカーは第一次世界大戦に参加した当事者として、戦争を引き起こした責任は歴史にあると考える。彼の言い分によれば、「戦争中、僕らは自我から休暇を取っていた。」(III. S. 26.)、つまり兵士たちは戦時中「自我 (Ich)」を機能させていなかったため、戦争の責任を負う必要はない。戦争を引き起こした「現代史の偶然的事実」と戦争の参加者は無関係であり、また「現代史の偶然的事実」は各人の「自我」に影響を与えない。その上で、彼は「自我」の休暇を終えた今こそ、時代を、歴史を作り出そう、と楽観的な希望を述べる。このようにベッカーは、戦争を遂行する側にいたにもかかわらず、戦争で怪我を負った被害者の立場から、責任を歴史そのものに転化し、自己防衛を図る。この屁理屈は霊界では熱烈に受け入れられ、ブラジルの男曰わく、それは「私たちの世界への入場券」になり、霊界でベッカーは「自由」ないし「力」を入手できる。そのために彼は「正しい踏み台」から霊界へ飛び込むよう期待されている。ここから、使者たちの狙いはベッカーを霊界に誘うことにあると判明する。

次いで登場するライオンは霊界での自由について語る。ブラジルの男が紳士的にベッカーを霊界へ誘ったのに対し、ライオンは権力の象徴にして悪しき敵を表象し、タウラーの説教では悪魔と同一視される存在であり⁽¹²⁾、ベッカーに親称で語りかけ、強引に霊界へ引っ張っていかうとする。

「(略) 霊界への飛び込みをやってみろ。あんたは自由だ。あんたを統べる法はない。誰があんたに命令しようか。来いよ。俺と一緒に現存在とは何か経験しよう。」

「それは何だ？」

ライオンはぴかぴか光る黄色い目を彼に向けた。

「生の段ばしごがある。下は重く、上は軽い。俺たちはそれを通り抜ける。俺たち霊は最も軽く、最も速い。俺たちは電気を凌駕する。」

「俺たちは何をするのか？」

「俺たちは何でも手に取り、重さを量り、吹き飛ばすことができる。あんたはライオンになって草原に横たわり、レイヨウになって藪を駆け抜け、コオロギになってリンリン鳴き、船になって海岸に繋がれ、風の中でうめくこともできる。世界はあんたに開かれている。境界が通行の自由を定めるのではない。あんたの内に法はなく、あんたを統べる法はない。ただ自我のみ。自由で力強い現存在。俺たちの現存在は燃えに燃える。」

「あんたたちは火か？」

「大抵の場合、火だ。なんとなれば俺たちは力だからだ。」(III. S. 259.)

ライオンは、「霊界」における「霊 (Geist)」の「現存在／そこにあること (Dasein)」について語る。ヨーロッパの精神史において、人間は「霊」と「身

体」から成るとされ、人間は「霊」と「身体」が結合する期間のみ人間として生きる。「霊」は不滅であり、結合先の「身体／物体 (Körper)」に相応しく生き、「身体」が時間の経過に従って機能なくなると、そこから離れ、次の「身体／物体」に入り込む。そして「霊」は「身体」に宿っている間に善く生きると、「霊」の故郷に帰ることができる。さて、ライオンは、「霊」の「現存在」を「生の段ばしご」と表現する。「霊」は「身体／物体」と結びつけばそれだけ「重く」なり、「身体／物体」から離れて単独で存在すれば「軽く」なる。「霊」そのものは「最も軽く、最も速く」、「身体／物体」の「境界」を易々と通り抜ける。ライオンが「身体／物体」の具体例として、ライオン、レイヨウ、コオロギと船を挙げるように、「霊」は、単独で存在することも、任意の「身体／物体」と結びつくこともできる。「霊」のあり方を定めるのは「自我」であり、それは「火」と言い換えられる。「自我」は、自らの経験に基づいて作り上げた「法」や他者によって定められた「法」とは無関係に、<いま・ここ>を生きるのである。

翌日、ネズミがベッカーの前に現れて、二人は対話を交わす。前日にブラジルの男が「ネズミ (Maus) がベーコンの匂いに惹かれるように」(III. S. 234.) という比喩を用いたとき、ベッカーは「あなたは『ネズミ』と言いましたね。この言葉を意図的に選びましたか。私には丁度この名前の友人がいるのです。」(ebd.) と言い、「ネズミ」が友人のマウスを連想させると指摘しており、ネズミ (Ratte) の姿に親しみを覚えている。ここから「霊」が、最初は異国の紳士の姿で丁寧に歩み寄り、次いでライオンの姿で威嚇して、最後にネズミの姿をとって懐柔作戦で彼を霊界に誘惑しようとしていると判明する。ネズミは、ベッカーが期待するような「自我」は存在しないと断言する。ベッカーは、ネズミの「自我」観を聞いて次のように言う。

「(略) 俺の内に炎がある。それは、そう、火、あんたが俺を引き入れる
 壮麗な火だ。そして俺はこれに耐えられない。俺は輝く火床に横たえら
 れ、生きている肉体のまま焼かれて、俺は耐えられない、ネズミよ、一
 分たりとも。これは俺の力を越えている。」

ネズミは高らかに笑い踊った。「火だ。下手に火を起こすな。これは浄化
 だ。あんたの古びた子供じみた自我は焼き去られる。それは新しい認識
 の数々に耐えられない。」(III. S. 291.)

ライオンとの対話で「自我」は「火」に喩えられたが、その「火」はベッ
 カーを丸ごと焼き尽くすという。ネズミが語る「火」も同じであり、ベッ
 カーが求めていた「古びた子供じみた自我」、人間が中核に持つとされる「自
 我」を焼き尽くし、新しい「自我」を生み出す。ネズミはこれを「浄化」と
 呼ぶ。「浄化 (Reinigung)」という語は、キーゼルの指摘したタウラーの精神
 的深化の第一段階を連想させ、またタウラーが虫の脱皮に喩えた精神的深化
 に相当する。こうして人間の「自我」は、「浄化」を経て、「肉体」から離れ、
 「霊」そのものの「自我」となり、常に燃えて新しい「自我」になりながら、
 「新しい認識の数々」を受け入れる。ベッカーはネズミの話に魅せられて「霊
 界への飛び込み」を試みる。それは具体的には自殺の企てとなる。

このように魂の歌はベッカーを死へ誘う。それは、傷痕軍人が戦争のトラ
 ウマに苦しんで自殺を図った一つの例と言えるだろう。霊界は、ベッカーの
 思考内容がそのまま知れ渡った場であり、いわば彼の脳内に存在するため、
 そこからの使者は彼の妄想の産物として片付けることもできる。だが作品内
 で「霊」は、ベッカーだけでなく、彼の身近な人物の前にも出現するため、
 話は簡単ではない。彼が「霊」と対話を交わした頃、ストラスプールの病院

で知り合った看護婦のヒルデが彼を追いかけてベルリンに来ていた。「霊」は、ネズミの姿でベッカーと話した直後に、彼女の前に出現する。それは、まず、つい先日自殺したばかりの彼女の元恋人の姿で、次いで、くるみ割り人形、そして猿の姿を取り、彼女の周囲の男性たちマウスとベッカーについて言及する。敬虔なカトリック信者であるヒルデは白昼に悪魔が現れたと思って取り乱し、ベッカーの元へ駆けつけ、首をつって意識を失った彼を発見し助けることになる。「霊」は時空間を自由自在に行き来し、さまざまな「身体／物体」と結合するため、「霊」がヒルデの前に出現しても不思議はない。またこの作品内で「霊」はスパルタクス団の理論的指導者ローザ・ルクセンブルクの前にも、まずは死んだ恋人として、次いで悪魔として出現しており⁽¹³⁾、「霊」は妄想の産物ではなくそれ自体として存在するとされる。さらに着目すべきは、「霊」の出現が、ローザの場合には1918年1月から11月にかけての時期と彼女が惨殺されるまでの三日間（1919年1月13日から15日）に限られており、ベッカーに出現した時期（1918年12月11・12日）とずれる点である。「霊」はさまざまな姿形を取るものの、同時期に複数の場所に現れず、作品内で一登場人物さながらに活躍する。そして「霊」はベッカーに「霊界への飛び込み」を勧めながらも、ヒルデの前に現れて彼の自殺を阻止させている。これらを考え合わせると、「霊」は作品内の出来事を進め、物語の指揮を取っているとも言える。ヒルデはベッカーを助けた後、彼から離れ、物語の表舞台から退場する。それは彼女が「霊」の指揮する物語において役割を終えたためであろう。それに対しベッカーが自殺未遂を経てなおも生き延びるのは、彼がまだ「霊」の物語に必要なからであり、彼は「霊」の指揮の下で「行動」を起こすことになる。

4 生者と死者

ベッカーは1918年の11月にストラスブールからベルリンに戻り自宅で療養していたが、1919年1月に外の世界へ出て行く。それというのも、彼は、物理学教師クルーグの紹介により、急遽元勤務先のギムナジウムで古典文献学の授業を受け持つことになったからである。ベッカーが古典文献学の教師である理由として、作品内で『アンティゴネー』を話題にするため、生徒たちにゲーテ時代の人文主義的理想を示すため、ドイツ革命の道徳的権利とこれが失敗した理由を示すため、の三点が挙げられる⁽¹⁴⁾。これらを念頭に置いて、彼の教室で行われる『アンティゴネー』論争を見てみよう。

ベッカーはそれまでの授業を引き継ぎ、ソフォクレスの悲劇『アンティゴネー』を取り扱う。彼は、自室にソフォクレスの胸像を飾り、ネズミとの対話の中で「多くの暴力的なものが生きている。だが人間より暴力的なものはない。人間よりも。」(III. S.293)⁽¹⁵⁾と、『アンティゴネー』の有名な合唱の一節をさらっと口にするソフォクレス愛好者であり、女性を蔑視し戦争を礼賛する生徒たちのアンティゴネーへの批判的態度に驚く。そこで彼は古代ギリシアの考え方を踏まえて『アンティゴネー』を解釈しようと提案し、作品の概要を押さえるべく話を始める。

『アンティゴネー』は、ソフォクレスの悲劇『オイディプス王』、『コロノスのオイディプス』に続く内容の作品であり、オイディプスの娘の一人アンティゴネーが主人公である。彼女の兄二人が王位を巡って戦い共に斃れたが、兄の一人ポリネイケスは、国家に反逆した罪人となるため、彼の亡骸の埋葬は許されない。だがアンティゴネーは禁を犯して兄の亡骸を埋葬し、死刑に処されることになる。

ベッカーは古代ギリシアの人間観や運命観が現代とは異なると生徒たちに説明する。古代の人々は現代的な意味での「自我」を意識していなかったが、アンティゴネーは「感情の赴くままに」(IV. S. 226.) 兄を埋葬するという行動を起こしており、「国家に対して人格の、個人の権利を代表する」(ebd.)。ベッカーは、『アンティゴネー』における個人と国家の対立という一般的解釈をひとまず紹介し、二度目の授業のときに独自の解釈を披露する。

だが実際、作品の本来の主人公は彼女ではなく、——死んだポリネイクスだ。作品で問題とされるのは、一人の死者による生者たちへの権利要求だ。一人の戦士が斃れた。彼は純粋な形見を残さなかった。この死者は目に見えなければ触ることもできず、そればかりか声を聞くこともできないが、彼は生者の領域に入り込み、妹のアンティゴネーに代弁者を見出した。彼を心に掛けたのは一人の女性だった。女性が生まれていない者を、まだ存在しない者を受け入れるように。彼は、妨げられて出現することはできないが、彼女の中で行動し、彼女の身体と魂を用いており、彼女は彼から離れられなかった。そして彼女は彼から離れなかった。それというのも、彼が要求することは彼の権利だったからである。(略) 古代の人々は、我々もこの素晴らしい作品から学ぶ通り、こう考えた。我々は畏敬と怖れを持って、目に見える存在の向こうを眺めるべきだと。(IV. S. 257.)

ポリネイクスは、王位継承争いの敗者にして国家への反逆者として、埋葬禁止という罰を与えられた。アンティゴネーが「感情」に任せて兄を埋葬したことは、国家に対する反逆となり、彼女も死刑を宣告される。だがベッカー

は、この兄妹を国家との関係から切り離し、単なる死者と生者と捉えてみせる。アンティゴネーが死者を弔う必要があると考え実行したのは、彼女が女性として、すなわち「生まれていない者を、まだ存在しない者を受け入れる」存在として、既に存在しない者つまり死者を受け入れることができたからである⁽¹⁶⁾。ベッカーは女性を存在の産出に関わる能力を備えた者と捉えて評価するが、その背後には生徒たちの女性蔑視に対する批判が隠れている。そして彼は、妹が兄を憐れに思い亡骸を埋葬した件を、死んだ兄が生者である妹に埋葬を要求したと読み換え、『アンティゴネー』の主役は「死んだポリネイケス」だと言う。死者は、生者の視覚、触覚、聴覚で捉える対象ではないが「心に掛ける」対象にはなり、アンティゴネーが兄を「心に掛けた」ときから、ポリネイケスが二人の関係において主導権を握るようになった。先のベッカーと霊界からの使者たちとの対話を踏まえると、ポリネイケスは純粋な「霊」になっており、妹の「身体と魂を用いて」、生者の世界へ働きかけ、死者への敬意を要求する。ベッカーは、生者はいかなる理由があれ、死者への「畏敬と怖れ」を持ち、「目に見える存在の向こうを眺めるべきだ」と結論づける。彼の考えは古代ギリシアの祖先崇拝を念頭に置いたものである。一般に祖先崇拝は先祖と子孫の関係に基づくが、ポリネイケスとアンティゴネーは兄妹であり、祖先崇拝の基準を正確に満たすわけではない。むしろ、ベッカーは、血縁的あるいは擬似的に先祖と子孫であるという限定を外し、より包括的に生者と死者の相関関係を思い描いており、「目に見える存在の向こう」を霊界と捉えて、生者は霊界からの働きかけを受けて行動すべきと考えるのである。

このように『アンティゴネー』論争を通して、生者による死者の弔いという問題が浮かび上がる。この時点で、彼は関知していないが、彼が受け持つ

たクラスのある生徒と校長との恋愛が取り沙汰されていた。この恋愛は、校長と生徒間というだけでなく、タブー視される同性間の恋愛であり、醜聞になりかねない。ベッカーは事情を知ると即座に、校長に休暇を取ってベルリンから離れるよう説得し、当該の生徒リーデルを中傷から守るべく奮闘する。その甲斐もなく、校長は思慕の念に駆られてベルリンに戻って生徒と会おうとし、リーデルの父親に殴られて死亡する。事件の全貌が明らかになると、校長の葬儀に参加しないよう、ベッカーにも保護者会から圧力がかかる。こうして『アンティゴネー』における死者の弔いという主題がベッカーにとって切実な問題と化す。彼は、生者は死者を弔わねばならないという信念を持って、校長の葬儀に参列し、世間から非難を浴びる中、毅然とした態度を貫いていく。

5 「黒い光」

ドイツ革命の騒乱がクライマックスに達する1919年1月には、ベッカーが口ずさんだソフォクレスの一節にあるように、「多くの暴力的なものが生きている」ことが実証される。高潔な人物と目されていたギムナジウムの校長は生徒との恋愛という禁断の行為に走った結果「暴力」を受けて亡くなり、その葬儀の参列者に対して保護者会と世間から非難という「暴力」が加えられる。ベッカーは、校長の葬儀の後行方がわからなくなったリーデルを探すうちに、スパルタクス団が立てこもる警察本部に入り込み、銃撃戦に参加する。自ら銃を手にしたベッカーにも「暴力的なもの」が発現している。彼が逮捕された際に、友人たちは、武装軍団に取り囲まれて銃撃戦に加わらざるをえなかったのだと申し立てて、無罪釈放を求めようとするが、ベッカーは自ら

銃を取ったと告げて、自発的に刑務所に入る。その様は、アンティゴネーが嘆きながら刑を受ける姿と対照的である。一ヶ月ほど前にブラジルの男に向かって戦争責任は「歴史」にあると発言したことに比べ、彼は自分の「行動」に責任を持つようになっている。ベッカーは魂の歌を通して内省し、『アンティゴネー』解釈を通して認識を深め、信念に基づき「行動」することにより、根本から変化したのである。

ベッカーは三年間服役して出所した後、かつての同僚のクルーグと再会すると、「黒い光」の話を持ち出す。それはかつてクルーグが物理学上の最新情報としてベッカーに話したことだった。

それら [黒い光] は目に見えないが存在する。普段は目に見えない暗い光が別の物質に降り注ぐと、奇妙な事態が生じる。これらの物質は、黒い光に当たって輝き出す。そうするとそれらは実際に、我々が目で知覚する光を、閃光を放つ。(III. S. 325.)

クルーグはこの直前にウッドの光学フィルターに言及しており、ここではアメリカの物理学者ロバート・ウィリアム・ウッド (1868-1955) の研究を応用したブラックライト、すなわち紫外線を放射する電灯が話題にされている。ブラックライトは、人間の目にはほとんど見えない紫外線を発し、それが当たった物体は内部の蛍光物質を発光させる。クルーグは面白い発見としてこの事実を伝えたただけだったが、ベッカーは「黒い光」に特別な意味を読み込み、三年後に「黒い光」を援用してドイツ革命の時期を回顧する。

僕らは、身体と感覚と脳を持って、僕らの生活圏である、ある光の領域

内だけを動く。これが、僕らの知っている大陸と形成物を伴った目に見える全世界だ。そしてこの目に見える世界は、それから単なる断片に、半分いや四分の一、それとも八分の一の現実に、それどころかひょっとしたら偽の現実になる。いずれの場合も絶対的確信を持って、僕らが動き回り「世界」と呼ぶこの世界は、補足を必要とする。これに相当するのが、僕らが感覚や意識を持って体験するものであり、人生すべてではない。僕らの考えはすべてではない。僕は正しい考えのことを言っているのだが。(IV. S. 708.)

ベッカーによると、世界は「目に見える」部分と見えない部分から成り、「黒い光」が世界に降り注ぐと、それまで見えなかった部分が輝き出す。人間は普通に暮らす分には「目に見える」部分にしか気付かない。それに対し、ベッカーは、「目に見える」部分は「断片」であり、場合によっては偽物に等しいと考え、「目に見える」部分を過大評価することを批判する。そして、「断片」を「補足」するには、目に見えない部分に気付くには、「感覚 (Sinne)」と「意識 (Bewußtsein)」でもって体験することが必要だと述べる。ベッカーが身をもって体験した革命期の日々も、やはり「断片」、「半分いや四分の一、それとも八分の一の現実」、「偽の現実」だった。では「世界」とは何か。再度ベッカーの『アンティゴネー』解釈を引き合いに出すならば、「目に見える」部分と目に見えない部分の関係は生者と死者の関係に相当する。生者が知らないうちに死者の指揮の下で活動するように、「世界」の「目に見える」部分は目に見えない部分によって補完されており、生者である「僕ら」が死者を慮るとき、目に見えない部分も含めた「世界」の全体が浮かび上がるのである。

ベッカーの考える意味での「黒い光」は、魂の歌を聴き「行動」の人となった彼の眼差しに他ならない。「黒い光」が通常「目に見えない」ように、出所後のベッカーは「目に見える」部分への関心を失い、「目に見える」世界での生活を捨てる。彼は紆余曲折を経て、強盗団に加わり、押し入りをした際に怪我を負い、それが元で亡くなると、彼の亡骸は強盗仲間の手で川に沈められる。元エリート教師がドイツ革命の混乱の中、逮捕されて、服役し、出所後は強盗をするまで零落した挙げ句に、亡骸が埋葬されないというのは、自業自得とはいえ、悲惨である。とりわけベッカーが重視した、生者による死者への敬意が彼の死に関して全く払われないことを考えると、悲惨さが際立つ。だが、デーブリーンはエッセイ「エピローグ」(1948)の中でベッカーの最期について、「天国と地獄はなおも彼の内で戦う。彼は外的に落ちぶれ、内的にかみ砕かれる。だが——彼は助け起こされる。」⁽¹⁷⁾と解説し、ベッカーは傍目には破滅的な最期を遂げるけれども、「助け起こされ」、救済に与るといふ。それは、ベッカーが、ドイツ革命の経過を追う読者の前に、「霊界」と「生者」の世界が連携し合い「世界」の全体を構成すること、生者が死者を配慮することの重要性を映し出して見せたからなのである。

本論文は、平成 27-28 年度成城大学特別研究費「デーブリーン『1918 年 11 月』における神秘思想の展開と衰退」の助成を受けて執筆された。

注

- (1) Alfred Döblin: November 1918. Eine deutsche Revolution. Bürger und Soldaten 1918. Frankfurt am Main 2013. 以下、本書は I と略す。
- (2) Alfred Döblin: November 1918. Eine deutsche Revolution. Verratenes Volk. Frankfurt am Main 2013. 以下、本書は II と略す。
- (3) Alfred Döblin: November 1918. Eine deutsche Revolution. Heimkehr der Fronttruppen.

- Frankfurt am Main 2013. 以下、本書は III と略す。
- (4) Alfred Döblin: November 1918. Eine deutsche Revolution. Karl und Rosa. Frankfurt am Main 2013. 以下、本書は IV と略す。
- (5) Alfred Döblin: Zu >November 1918<. In: ders: Schriften zu Leben und Werk. Frankfurt am Main 2015. S.274. 以下、本書は SLW と略す。
- (6) ハンス・ビーダーマン (藤代幸一監訳) : 図説世界シンボル事典、八坂書房、2015、S.156f.
- (7) Gabriele Sander: Alfred Döblin. S.203.
- (8) Vgl. I. S. 164f., S. 204f., II. S. 132., S. 424f., III. S. 228ff., S. 333f., IV. S. 747f., S. 757f.
- (9) Helmut F. Pfanner: Sachlichkeit und Mystik: Zur Erzählhaltung in Alfred Döblins Revolutionsroman. In: Internationale Alfred Döblin-Kolloquien 1980-1983. (Hg.) Werner Stauffacher. Bern 1986. S. 82.
- (10) 田島照久 : 解説、タウラー説教集 (田島訳)、創文社、2004、307 ページ。
- (11) Helmuth Kiesel: Literarische Trauerarbeit. Das Exil- und Spätwerk Alfred Döblins. Tübingen 1986. S. 435.
- (12) Kiesel: a.a.O., S. 459.
- (13) ローザの視霊体験については、試論「デーブリーン『一九一八年十一月』における「霊界」—ローザ・ルクセンブルクの視霊体験—」、『西日本ドイツ文学』第28号、日本独文学会西日本支部、2016、1-13 ページを参照されたい。
- (14) Heinz D. Osterle: Auf den Spuren der Antigone. Sophokles, Döblin, Brecht. In: IADK. 1980-1983. S. 90f.
- (15) この一節は一般に、「不思議なものは数あるうちに、人間以上の不思議はない」(呉茂一訳『ギリシア悲劇II ソフォクレス』ちくま文庫、1990、167 ページ)と訳され、ドイツ語訳でも通常は「ungeheuer (途方もない、恐ろしい)」と訳されるが、デーブリーンは「gewaltig (暴力的な)」と訳された翻訳を用いた。Vgl. Kiesel: a.a.O. S.440ff.
- (16) 女性が死者を受け入れる図式は、ローザ・ルクセンブルクの視霊体験でも繰り返される。
- (17) SLW. S. 316.